「日々の理科」（第 430 号） 2015（H27),-9,-6

「不遇な南斗六星」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

「北斗七星」は有名だ。教科書にも必ず載っている。「ほくとしちせい」と打てば、「北斗七星」と変換される。形づくる恒星も、１つを除いて２等星ばかり。形も良く、北斗七星を基準に、北極星やスピカやからす座を探すこともできる。

それに比べて、「南斗七星」は哀れである。「え、そんなのあったの？」と言われそうだ。「なんとろくせい」と打っても「何と六世」「難と鹿西」と意味不明の言葉しか出てこない。

「いて座銀河と南斗六星」
薄く〇を描いた星の並びが南斗六星である。真っ暗でわからなかったが、ここには電線があり、それが写り込んでしまったのが残念。北軽井沢で撮影。C. Tanaka

南斗六星（あ、ＰＣが学習したようで、だいぶ変換が正しくなってきた）は、独立した星座ではない。いて座を形づくる恒星の一部である。その点は、おおぐま座の一部である、北斗七星と同じだ。いて座は、地球（太陽系）から見て、銀河の中心方向に位置する。従って、いて座付近は、全天で天の川が一番明るく見える。北軽井沢では、いて座付近の天の川は、肉眼ではっきりと見える。南斗六星も、柄の部分を天の川につっこんでいる。

「南斗六星の拡大」
銀河の中心付近にあるので、多くの星や星雲に恵まれている。北軽井沢　C. Tanaka

北斗七星は北極星に近いので、日本でもほとんどが周極星で一年中見える。しかし、南斗六星は「天の赤道」に近く、観望適期の夏でも、地平線スレスレにしか見えない。しかし、南斗六星の周辺は銀河の中心。双眼鏡や低倍率の屈折鏡（天体望遠鏡）で見ると、実に美しい。真っ暗な背景の虚空に、恒星が浮かんでいるだけの視野。「深宇宙」を実感できるのだ。

私は、南斗六星のような不遇な星に心ひかれる。こういう星にこそ、美しさや価値が隠されているように思う。子どもも同じである。オリオン座のような子どももいれば、いるか座のような子どももいる。どの子どもにも、それぞれに才があるのだと思う。